

## 5章 日本語母語話者の英文表出プロセスを踏襲した文型練習

### 1.指導の背景

#### (1)なぜ今文型練習なのか

中高生のスピーキングの全体的レベル：簡単な英語で身の回りの事実を伝えたり自分の考えを表現したりする基本的コミュニケーションすらろくにできない。

↑生徒が自分の言いたいことを英語の文構造に従って短時間のうちに英文として表出することができないから。

特に中学校では文型練習よりも CLT(Communicative Language Teaching)を重視するようになった。

→アウトプットの質は上がったが量が十分ではない。

→文型練習を通して生徒からの英語のアウトプット量を十分に確保しながら、まず英語の文構造を生徒に定着させてから、より意味のある内容重視のコミュニケーション活動へとつなげる必要がある。

#### (2)これまでの文型指導の問題点

パターン・プラクティス：中学校で頻繁に使われていた。

パターン・プラクティスの弱点

- ・模倣と暗記を目的とした単調な反復練習だったため、言語形式と意味の結びつきが不十分であった。
- ・言語使用における場面と言語機能の関係についての説明が不十分であったために、練習した内容が実際のコミュニケーション活動にはつながりにくかった。

5 文型：高校で伝統的に行われてきた文型指導の基本となっている。

従来の文型指導は文法用語を多用し、文の構造を分析し説明する構文解析(parsing)とその知識の伝達に重点を置いていた。

→リーディング・ライティングには有効であるがリスニング・スピーキングなどの即時対面的コミュニケーションには有効でない。

#### (3)中間日本語の利用

日本語母語話者が英文を作るときには、日本語で考えてから英語を組み立てるということが起こる。そのため日本語を使わずに即座に英語の意味を理解したり、自分の言いたいこ

とを英語で表現することは難しい。

↑日本人は EFL 学習者であるため自然に英語を習得するための英語に触れる時間が少ない。

新しい文型練習：日本語をメタ言語（文法などにおいて言語を説明するために用いられる言語）としてではなく、英語のアウトプットへつなげるための中間日本語として利用する。

留意点

①語順

②主語と主題

③文脈依存度

これらの日本語と英語の特徴の違いを生徒に理解させた上で、効果的な練習方法を用いて生徒から英語のアウトプットを質・量ともに引き上げることが求められる。

## 2.指導の実際

(1)ステップ 1：チャンクに慣れて中間日本語を作る

ア)チャンクに慣れさせる

日本語の文をチャンクに区切る練習をさせる。(p. 75)

イ)中間日本語を作らせる

日本語のチャンクを英語の語順に並べ替えて中間日本語を作る。

その際、英語の 5 文型をチャンクの語順を決める枠組みとして使用する。

(5 文型の説明は最小限にして練習を通して理解させる。)

日本語の統語的特徴によりそのままでは英語になりにくい日本語があることに注意する。

→日本語を補ったり、置き換えたりして英語になりやすい中間日本語を作る。

### 考察・感想

この章で述べられていた日本語を英語のアウトプットのための中間日本語として使うという方法は非常に有効だと考える。この章で述べられているように日本にいる英語学習者のほとんどは英語に触れる機会が少なく、英語習得に適した環境にあるとは言えないだろう。本章でもあったように日本人が日本語を使わずに英語を発することができない原因はここにあると思われる。日本人が英語を学習する際、やはり日本語を使わなければならないだろう。この点から私は中間日本語を用いて英語のアウトプットを指導するこの方法は現在の学習環境を考慮した効果のある方法であると考えられる。